

【本文・問題】龍谷古文:2022.1.31

【本文】

中将は、山におはし着きて、僧都もめづらしがりて、世の中の物語し給ふ。その夜は泊まりて、声尊き人々に経など読ませて、夜一夜遊び給ふ。禪師の君、細かなる物語などするついでに、「小野に立ち寄りて、ものあはれにもありしかな。①(世を捨てたれど、なほさばかりの心ばせある人)は、難うこそ」などのたまふついでに、「風の吹き上げたりつる隙より、髪いと長く、をかしげなる人こそ見えつれ。あらはなりと思ひつらむ、立ちてあなたに入りつる後手、なべての人とは見えざりつ。さやうの所に、よき女は置きたるまじきものにこそあめれ。明け暮れ見るものは法師なり。おのづから目慣れて覚ゆらむ。②(不便なることなりかし)」とのたまふ。禪師の君、「この春、初瀬に詣でて、あやしくて見出でたる人となむ聞き侍りし」とて、見ぬことなれば細かには言はず。「あはれなりけることかな。いかなる人にかあらむ。世の中を憂しとてぞ、さる所には隠れぬけむかし。昔物語の心地もするかな」とのたまふ。

またの日帰り給ふにも、「過ぎ難くなむ」とておはしたり。さるべき心遣ひしたりければ、昔思ひ出でたる御まかなひの少将の尼なども、袖口さま異なれどもをかし。いとどいや目に、尼君はものし給ふ。物語のついでに、「忍びたるさまにものし給ふらむは、誰にか」と問ひ給ふ。③(わづらはしけれど)、ほのかにも見つけ給ひてけるを、隠し顔ならむもあやしとて、「忘れわび侍りて、いとど罪深うのみ覚え侍りつる慰めに、この月ごろ見給ふる人になむ。いかなるにか、いとも思ひしげきさまにて、世にありと人に知られむことを、苦しげに思ひてものせらるれば、かかる谷の底には誰かは尋ね聞こえむと思ひつつ侍るを、いかでかは開きあらはさせ給へらむ」と答ふ。「うちつけ心ありて参り来むにだに、④(山深き道のかごとは聞こえつべし)。まして思しよそふらむ方につけては、ことごとに隔て給ふまじきことにこそは。いかなる筋に世を恨み給ふ人にか。慰め聞こえばや」など、ゆかしげにのたまふ。

出で給ふとて、畳紙に、

A:

あだし野の風になびく女 郎花われしめ結はむ道遠くとも

と書いて、少将の尼して入れたり。尼君も見給ひて、「この御返り書かせ給へ。いと心憎き氣つき給へる人なれば、うしろめたくもあらじ」とそそのかせば、「いとあやしき手をば、いかでか」とて、さらに聞き給は【X】ば、「はしたなきことなり」とて、尼君、「聞こえさせつるやうに、世づかず、人に似ぬ人にてなむ。

B:

うつし植ゑて思ひ乱れぬ女 郎花うき世をそむく草の庵に」

とあり。こたみはさもありぬべしと思ひゆるして帰りぬ。

文などわざとやらむは、さすがにうひうひしう、ほのかに見しさまは忘れず、もの思ふらむ筋何事と知らねどあはれなれば、八月十余日のほどに、小鷹狩のついでにおはしたり。(中略)対面し給へるにも、「心苦しきさまにものし給ふと聞き侍りし人の御上なむ、残りゆかしく侍る。何事も心かなはぬ心地のみし侍れば、山住みもし侍らまほしき心ありながら、ゆるい給ふまじき人々に、思ひ障りてなむ過ぐし侍る。世に心地よげなる人の上は、⑤(かく屈したる人の心からにや)、ふさはしからずなむ。もの思ひ給ふらむ人に、思ふことを聞こえばや」など、いと心留めたるさまに語らひ給ふ。

(紫式部「源氏物語」による)

☆注釈

○山 = ここでは、横川(比叡山の北側付近)を指す。

○声尊き人々 = 声のすばらしい僧たち。

○経など読ませて = 声明(しょうみょう)を歌わせて。

○禪師の君 = 中將の弟。僧になっている。

○小野 = 現在の京都市左京区の一部。一乗寺から八瀬(やせ)・大原付近を指す。

○初瀬 = 長谷寺のこと。現在の奈良県桜井市初瀬にある真言宗豊山(ぶざん)派の総本山。

○またの日 = 翌日。

○御まかなひ = 食事のお給仕。

○少將の尼 = 尼僧に仕えている尼の名。

○袖口さま異なれども = 袖口の色は異なっているが。尼僧になって法衣を着ていること。

○いや目に = 涙ぐんで。

○忘れわび侍りて = 亡き娘のことが忘れられませんで。

○うちつけ心 = 浮気心。

○思しよそふらむ方 = 亡き娘と同じように思っておられるという方。

○畳紙 = 檀紙(だんし)、鳥の子紙など、上質な紙を折りたたんだもの。懐に入れておいて、鼻紙や歌を書きつける紙として用いた。

○女郎花 = 秋の七草の一つ。夏から秋に小さな黄色の花をつける。しばしば女性にたとえられる。

○心憎き気 = 思慮深い様子。

○小鷹狩 = 小型の鷹を使って小鳥などを捕る鷹狩り。初秋に行う。

【問題】

問一 傍線部①「世を捨てたれど、なほさばかりの心ばせある人」の解釈

- ① 僧にはなったけれど、それでもあれほど趣味がよく、心配りのある男性
- ② 僧にはなったけれど、それでも美しい音楽にいくらかは関心がある男性
- ③ 尼僧にはなったけれど、それでもあれほど趣味がよく、心配りのある女性
- ④ 尼僧にはなったけれど、それでも美しい音楽にいくらかは関心がある女性

問二 傍線部②「不便なることなりかし」には、中将のどのような気持ちが含まれている？

- ① 女が尼僧ばかりの環境に少しずつ慣れていくのは、女にとって不都合なことだと思う気持ち。
- ② 女が尼僧ばかりの環境に少しずつ慣れようとする理由を、尼僧たちのために知りたく思う気持ち。
- ③ 女が尼僧ばかりの環境に少しずつ慣れていけるよう、女の役に立ってやりたいと思う気持ち。
- ④ 女が尼僧ばかりの環境に少しずつ慣れていくと、尼僧たちが気の毒なのではないかと思う気持ち。

問三 傍線部③「わづらはしければ」とありますが、そのように感じている人は誰？

- ① 中将
- ② 浮舟
- ③ 尼君
- ④ 少将の尼

問四 傍線部④「山深き道のかごととは聞こえつべし」の解釈

- ① 「山深い道をたどってきて大変だった」と、少しは泣き言を申し上げようと思います。
- ② 「山深い道をたどってきたのに」と、やはり言い訳を申し上げる理由があるはずです。
- ③ 「山深い道をたどってきて大変だった」と、嘘のようですが申し上げてみたいのです。
- ④ 「山深い道をたどってきたのに」と、きっと恨み言を申し上げてよいのだと思います。

問五 AとBの和歌は、それぞれ誰のどのような気持ちを表している？

- ① Aの和歌は浮舟を手に入れたいという中将の気持ちを示している。Bの和歌は尼が詠んだもので、浮舟がこの山荘に移ってからも思い悩んでいるから、そっとしておいてほしいという気持ちを示している。
- ② Aの和歌は浮舟に出家しないでほしいという中将の気持ちを示している。Bの和歌は尼が詠んだもので、浮舟の出家したいという意志が固く、その熱意に尼僧の自分も応えたいという気持ちを示している。
- ③ Aの和歌は浮舟を手に入れたいという中将の気持ちを示している。Bの和歌は尼が詠んだもので、浮舟の出家したいという意志が固く、その熱意に尼僧の自分も応えたいという気持ちを示している。
- ④ Aの和歌は浮舟に出家しないでほしいという中将の気持ちを示している。Bの和歌は尼が詠んだもので、浮舟がこの山荘に移ってからも思い悩んでいるから、そっとしておいてほしいという気持ちを示している。

問六 空欄 [X] を補うのに、最も適当なもの

- ① ら
- ② せ
- ③ れ
- ④ ね

問七 傍線部⑤「かく屈したる人の心からにや」の解釈

- ① 「自分の身が自分の思うようにならない」と浮舟がふさぎこんでいるからなのか
- ② 「浮舟が自分の思うようにならない」と中将がふさぎこんでいるからなのか
- ③ 「自分の身が自分の思うようにならない」と中将がふさぎこんでいるからなのか
- ④ 「自分が中将の思うようにふるまえない」と浮舟がふさぎこんでいるからなのか

問八 『源氏物語』の成立と同じ時期に活躍した人物

- ① 阿仏尼
- ② 和泉式部
- ③ 式子内親王
- ④ 持統天皇

【解説】

【解答一覧】

問一: ③

問二: ①

問三: ③

問四: ④

問五: ①

問六: ④

問七: ③

問八: ②

【解説】

問一: 人物把握と語彙(正解 ③)

「心ばせ」という重要語を知っているかどうかの勝負

文脈: 禅師の君(男)が、小野に住むある人(尼君＝女性)の住まいを見て感想を言っている。

心ばせ: 「気配り」「嗜み(たしなみ)」「情趣を解する心」。

判定: 「世を捨てて尼になったけれど、それでもあれほど風流な嗜みがある人(女性)は…」という意味になる。

①②は「僧」としている点で×。

④は「音楽」に限定している点で×。

問二: 心情把握(正解 ①)

「不便(ふびん)」の古語的意味を押さえる。

不便なり: 現代語の「不便だ」ではなく、「気の毒だ」「かわいそうだ」という意味がメイン(「不憫」に通じる)。

文脈: 中将(薫)は、若い美女(浮舟)が、むさ苦しい法師ばかりを見る生活に「目慣れて(慣れて)」しまうことを想像している。

判定: 「若い女性が、こんな年寄りばかりの環境に染まってしまうのは気の毒(かわいそう)なことだ」というニュアンス。

①が最も近い。「女にとって不都合(＝よくない状態)」＝「気の毒」。

問三：主語判定（正解 ③）

誰が「わづらはし（面倒だ、気が重い）」と思っているか。

直前：中將が「誰ですか？」と尋ねる。

直後：「……と答ふ（と答える）」。

判定：答えているのは、浮舟を隠している尼君だ。

尼君は、浮舟の素性（自殺未遂など）を説明するのが「面倒・複雑」だが、見られてしまった以上は誤魔化せない、と思っている。

問四 正解 ④

☆なぜ「恨み言」なのか

この文脈での「かごと（託言）」のニュアンスが勝負の分かれ目だ。

文脈：中將は、遠い陰しい山道を越えてやってきた。しかし、尼君は「浮舟を会わせられない（隠し顔）」という態度をとっている。

中將の論理：「もし私が単なる浮気心（うちつけ心）で来たとしても、『こんな山奥まで苦勞して来たのに（会わせてくれないのですか）』という不満・文句くらいは、言ってもいいはずだ」

☆選択肢の比較（なぜ1でなく4なのか）

①「泣き言」：弱音を吐くこと。「足が痛いよ～」「辛いよ～」というニュアンス。これでは、ただ中將が情けないだけになる。

④「恨み言」：相手の仕打ちに対する不満や恨み。「せっかく来たのに、その対応はひどいのではないか」という相手への抗議のニュアンスが含まれる。

古文の恋愛場面における「かごと」は、相手のつれない態度に対して、「こちらの苦勞や思いをわかってくれない」と訴える「恨み言（うらみごと）」として訳すのが定石！

中將の「威圧感はないが、理詰めで迫る」性格を考えても、弱音（泣き言）を吐くより、相手に道理を説いて迫る（恨み言）の選択肢 ④ が適切！

問五：和歌の解釈(正解 ①)

【なぜ「出家しないで」ではなく「手に入りたい」なのか】

この問題のポイントは、和歌の「表面上の言葉」と、その奥にある「根本的な動機(気持ち)」のどちらを答えるかにある！

1. 中将の和歌(A)の分析

「あだし野の風になびく女 郎花 われしめ結はむ道遠くとも」

④の根拠(表面)：「風になびく女」＝「出家しないでくれ」これは直訳としては正解

①の根拠(本音)：「われしめ結はむ(私が独占しよう・自分のものにしよう)」という表現がある。

中将が「出家しないで」と言う理由は、単に尼になるのが惜しいからではない。「私があなたを自分の女として囲いたい(手に入りたい)」という強い独占欲があるからだ！

☆大学受験の「心情把握」では、表面的な命令(～するな)よりも、その動機となる能動的な欲望(～したい)を選択させる場合、後者が正解になることが多い。

よって、「手に入りたい」とある ①or③が、心情説明として一段階深い。

2. 尼君の返歌(B)の分析

「うつし植ゑて思ひ乱れぬ女 郎花 うき世をそむく草の庵に」

後半の選択肢(①か③か)

①「そっとしておいてほしい」：「思い乱れぬ(＝ひどく思い悩んでいます)」と、浮舟の混乱状態を強調している。これは「今は混乱しているから、(無理に会おうとせず)そっとしておいてください」という「言い訳(拒絶)」のニュアンスになる。

③「熱意に応えたい」：これだと「浮舟は出家したがっているのに、私はそれを応援します」という意味になる。しかし、直前の本文で尼君は「返事を書きなさい」と浮舟を説得(そそのかせば)している。尼君自身は二人の仲を取り持ちたいと思っているので、「出家を応援する」という選択肢は文脈と矛盾する。

【結論】

Aの「独占欲(手に入りたい)」

Bの「今は無理(そっとしておいて)」この2つが組み合わさっている①が、文脈上もっとも整合性が取れる！

問六: 文法(正解 ④)

接続の問題

形: 「聞き給は【×】ば」

意味: 浮舟は手紙を書くのを嫌がって、中将の願いを「お聞きにならない」ので、尼君が代筆することになった。

文法: 「聞き(連用形) + 給は(ハ行四段・未然形) + 【打消】 + ば(確定条件)」。

未然形に接続する打消の助動詞は「ず」。

「～ので(確定条件)」を作るには、「已然形 + ば」の形にする必要がある。

「ず」の已然形は「ね」。

よって「聞き給はねば(お聞きにならないので)」となる。

問七: 文脈把握(正解 ③)

誰が、なぜ「屈して(気が滅入って)」いるのか。

文脈: 中将(薫)は、自分の人生を「何事も心にかなはぬ(思い通りにいかない)」と嘆いている、根っからのネガティブキャラだ。

解釈: 「世の中の明るく楽しそうな人は、このようにふさぎ込んでいる(私のような)人の気質からして、似つかわしくないのです」と言っている。

判定: 「屈したる人」= 中将自身。理由は「自分の人生が思い通りにいかないから(注釈にある通り)」。

問八: 文学史(正解 ②)

常識知識問題!

紫式部(源氏物語): 平安時代中期(一条天皇の中宮彰子に仕えた)。

選択肢:

- ①阿仏尼: 鎌倉時代(『十六夜日記』)
- ②和泉式部: 平安時代中期(紫式部と同僚のようなもの)
- ③式子内親王: 新古今集の時代(平安末～鎌倉初)
- ④持統天皇: 万葉集の時代(飛鳥・奈良)

【和訳】

【現代語訳】

中将(薫)は、山(比叡山の横川)に到着なさって、僧都も珍しく思って、世間話などをなさる。その夜はそこに泊まって、声の尊い僧たちにお経(声明)などを読ませて、一晩中管弦の遊びをなさる。

(中将の弟である)禅師の君が、細かい話などをするついでに、「(帰りに)小野に立ち寄って、なんとまあ、しみじみとした風情であったことよ。①世を捨てて尼になったけれど、やはりあれほどの気配り(嗜み)のある人(=尼君)は、めったにいない」などとおっしゃるついでに、「風が(御簾を)吹き上げた隙間から、髪がとても長く、美しい人が見えました。(御簾の中が)丸見えだと思ったのでしょうか、立ってあちらに入っていた後ろ姿は、並の人とは見えませんでした。あのような場所に、身分の高い女は置いておくべきではないようです。明け暮れ見るものは法師ばかり。(女性が)自然と(そんなむさ苦しい法師に)目が慣れてしまうでしょう。②(それは)気の毒なことですよ」とおっしゃる。

禅師の君は、「今年の春、初瀬(長谷寺)に参詣して、不思議な縁で見つけ出した人だと聞きました」と言って、(自分は詳しくは)見ていないことなので詳細は言わない。(中将は)「しみじみとすることだなあ。どのような人なのだろうか。世の中が辛いといって、そのような所(小野の山里)に隠れ住んでいるのだろうか。昔物語のような気もするなあ」とおっしゃる。

翌日(中将が)お帰りになる時にも、「(小野を)素通りしがたくて」といっていらっしゃった。(中将が)しかるべき心遣い(贈り物など)をしたので、昔を思い出しているお給仕役の少将の尼なども、袖口の色こそ(尼姿で)異なっているが風情がある。ますます涙ぐんで、尼君はいらっしゃる。

話のついでに、「人目を忍んでいる様子でいらっしゃるのは、誰ですか」と(中将が)お尋ねになる。③(尼君は、事情を話すのは)面倒で気が重いけれど、ほんの少しでも(中将が)見つけなさってしまったのを、隠し立てするような顔をするのも不自然だと思って、「(亡くなった娘の大君のことが)忘れかねまして、ますます罪深くばかり思われます慰めにと、ここ数ヶ月お世話している人でして。どのような事情か、とても悩みが多い状態で、生きてると人に知られることを、辛く思っているから、『このような谷の底(山奥)には誰が尋ねて申そうか(誰も来ないだろう)』とっておりますのに、どうして見つけなさってしまったのでしょうか」と答える。

(中将は)「たとえ(私が)ふとした浮気心で参ったような場合でさえ、④『こんな山深い道を苦勞して来たのに(会ってもくれないのか)』という恨み言(不満)は申し上げてもよいはずです。まして、(亡き人と)なぞらえていらっしゃるような方(=浮舟)については、いちいち隠し立てなさるべきではありませんよ。どのような事情で世を恨んでいらっしゃる人なのか。(私が)お慰めしたいものだ」などと、知りたそうにおっしゃる。

(中将が)退出なさるといので、畳紙(懷紙)に、A: あだし野(無常の野)の風になびく(=尼になるな)女郎花よ。私が(お前を)独占して契りを結ぼう。道のりは遠くてもと書いて、少将の尼に託して(御簾の中に)入れた。

尼君も(その歌を)御覧になって、「このお返事をお書きなさい。(中将は)とても思慮深く気配りな
さる方だから、不安なこともないでしょう」と(浮舟に)勧めるが、(浮舟は)「とても下手な筆跡を、
どうして(お見せできましょうか)」と言って、全くお聞き入れにならないので、「きまりが悪いこと
です」と言って、尼君が(代筆して)、「申し上げましたように、世間慣れしておらず、普通とは違っ
ている(変わった)人でして。B:(都から)移し植えられて思い悩んでいる女郎花ですよ。(今は)憂
き世を背く草の庵におりますので(そっとしておいてください)」とある。今回(の返事)はそう
あっても仕方がないだろうと(中将は)許容して帰ってしまった。

手紙などをわざわざ送るのは、やはり気が引けて、しかしほのかに見た姿は忘れられず、思い悩
んでいる事情が何事とは知らないが気にかかるので、八月十日過ぎの頃に、小鷹狩のついでに
いらっしゃった。(中略)対面なされた時にも、「お辛い様子でいらっしゃると聞きました人の身
の上、心残りです。私自身、何事も思い通りにいかない気持ちばかりしております
ので、山住まいもしたいと思う心がありながら、許してくれそうもない人々(=母宮など)に、気兼
ねして過ごしております。世間で気持ちよさそうに(楽しそうに)している人の身の上は、⑤この
ように気が滅入っている(私自身の)気質のせいでしょうか、不釣り合いなのです。もの思いをなさ
っているような人(=あなた)に、私の思うことを申し上げたいものです」などと、たいそう心を留めて
いる様子で語らいなされる。

【練習問題】

【練習問題】